

高等学校における部活動に関する一考察

—愛知県内のインターアクトクラブに着目した検討—

A Study on Extracurricular Club Activities of High Schools

: Focusing on the case of International Action Club in Aichi Prefecture

林 幸 克
HAYASHI Yuki-yoshi

1 問題意識の所在

今日の高等学校における部活動は、教育課程外活動の位置づけである。しかし、高等学校学習指導要領（2009）の総則に、「生徒の自主的、自発的な参加により行われる部活動については、スポーツや文化及び科学等に親しませ、学習意欲の向上や責任感、連帯感の涵養等に資するものであり、学校教育の一環として、教育課程との関連が図られるよう留意すること。その際、地域や学校の実態に応じ、地域の人々の協力、社会教育施設や社会教育関係団体等の各種団体との連携などの運営上の工夫を行うようにすること。」と記されており、教育課程と関連を図りながら活動を展開することが望まれている。

では、高校生の部活動への加入状況がどのようになっているのか、表1に整理した⁽¹⁾。

表1 高校生の部活動への加入状況 (%)

		1997年	2004年	2007年	2009年
運動部	全体	49.0	55.8	42.4	58.4
	男子	56.3	66.5	53.9	70.2
	女子	41.1	43.8	30.7	45.4
文化部	全体	22.0	21.1	19.5	25.0
	男子	13.8	10.0	12.0	13.5
	女子	30.9	33.6	27.3	37.7

調査対象等の違いの影響を加味する必要があるが、全体として、運動部への加入が約50%（男子約60%、女子約40%）、文化部への加入が約20%（男子約10%、女子約30%）という状況である。この結果から、全体として運動部への加入率が高いことがわかる。

こうした現状を反映してか、部活動について論じる際、運動部活動を念頭に置いた記述が見られたり、運動部活動だけに焦点化した文書が散見されるという事実がある。例えば、以下のものがそれに相当する。なお、下線は筆者が付記したものである。

○文部省初等中等教育局通達「中学校・高等学校における運動部の指導について」（1957）

「運動部の活動は、学校教育活動の重要な場であるから、校長は、生徒の自主的活動が健全に行われるよう、運動部長や種目別の各部の担当教員などを監督して、その指導の万全を計ること。」

○文部省体育局長通達「中学校・高等学校における運動クラブの指導について」（1968）

「望ましい人間関係の育成に留意し、運動クラブに明朗快活な気風を育てるようにすること。この場合、学級（ホームルーム）担当教員や父兄ともじゅうぶんに連絡を保つようにすること。」

○中央教育審議会第一次答申「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について」（1996）

「部活動は、教育活動の一環として、学級や学年を離れて子供たちが自発的・自主的に活動を組織し展開されるものであり、子供の体と心の発達や仲間づくり、教科を離れた教員との触れ合いの場として意義を有しているものである。しかしながら、学校が全ての子供に対して部活動への参加を義務づけ画一的に活動を強制したり、それぞれの部において、勝利至上主義的な考え方から休日もほとんどなく長時間にわたる活動を子供に強制するような一部の在り方は改善を図っていく必要がある。」

○保健審議会答申「生涯にわたる心身の健康の保持増進のための今後の健康に関する教育及びスポーツの振興の在り方について」（1997）

「運動部活動は、学校教育活動の一環として行われており、スポーツに興味と関心を持つ同好の生徒によって自主的に組織され、より高い水準の技能や記録に挑戦する中で、スポーツの楽しさや喜びを味わい、豊かな学校生活を経験する活動である。この運動部活動は、生涯にわたってスポーツに楽しむ能力や態度を育て、体力の向上や健康の増進を図るだけでなく、学級や学年を離れて生徒が自発的・自主的に活動を組織し展開することにより、生徒の自主性、協調性、責任感、連帯感などを育成するとともに、仲間や教師（顧問）との密接な触れ合いの場として大きな意義を有するものである。」

○文部省体育局長通知「中学校及び高等学校における運動部活動について」（1998）

「生徒の多様なスポーツニーズにこたえ、保護者や地域に開かれた運動部活動とする観点から、学校が必要に応じて外部指導者に協力を求めることができるよう所要の条件整備に努めることや、地域の実態に応じて保護者や地域住民との意見交換を行ったり、地域のスポーツクラブ等との交流を図ること等に留意すること。」

しかし、その内容を吟味すると、いずれも運動部活動だけではなく、文化部活動にもあてはまる意義や教育効果が示されているといえる。上記以外にも、中学生・高校生のスポーツ活動に関する調査研究協力者会議「運動部活動の在り方に関する調査研究報告」（1997）では運動部活動の意義として5点を挙げているが、次に示す3点は、下線部を文化部に置き換えて、文化部活動の意義として捉えることもできる。

喜びと生きがいの場：「運動部におけるスポーツの実践は、参加する生徒にとって心身をリフレッシュさせるものである。のみならず、運動部活動は、好きなスポーツに仲間とともに取り組む場であり、また、教科の学習とは離れて各自のよさが認められることもあり、多くの生徒の生活に張り合いを与え、喜びと生きがいをもたらしている。」

豊かな人間性の育成：「運動部活動は、学級や学年を離れた集団の中で生徒たちが、互いに認め合い、励まし合い、汗を流し、協力し合い、高め合いながら、自発的・自主的に活動を展開するものであり、生徒にとって、友情や連帯感をはぐくみ、自己の存在や責任を見つめ、努力や忍耐、スポーツマンシップ、思いやり、集団生活のルール等を身に付ける場となっている。」

明るく充実した学校生活の展開：「運動部活動は、参加する生徒各自のためになっているだけでなく、それを学校の教育活動に位置付け、教師（顧問）をはじめとして学校が支援することにより、生徒や保護者の学校への信頼感をより高めるとともに、明るく充実した学校生活の展開、学校の活性化にもつながっている。」

これらのことを勘案すると、部活動について議論する際には、運動部活動だけではなく、文化部活動も視野に入れて検討する必要がある。

例えば、子ども・若者育成支援推進法（2009）の施行を受けて、「青少年育成施策大綱」（2008）に代わるものとして作成された「子ども・若者ビジョン」（子ども・若者育成支援推進本部決定、2010）において示されている「子ども・若者等に対する施策の基本的方向」をみると、文化部活動の主たる

活動内容となり得る文化的・社会的活動について言及されている。

例えば、「多様な活動機会の提供」として、地域等での多様な活動が示され、「様々な場における、環境学習、自然体験、集団宿泊体験、奉仕体験、スポーツ活動、芸術・伝統文化体験、ダンス等の創作的活動といった様々な体験活動や、異世代間・地域間交流等の多様な活動の機会の提供を推進します。」とされている。

また、「社会参加の促進」について、ボランティアなど社会参加活動の推進が示され、「ボランティア活動を通じて市民性・社会性を獲得し、地域社会へ参画することを支援します。」、国際交流活動に関して、「若者の国際理解や国際的視野の醸成、日本人としてのアイデンティティの確立を図るため、国内外の青少年の招へい・派遣等を通じた国際交流や異文化体験の機会の提供を行います。」とされている。

高等学校の文化部活動の一つにインターアクトクラブ²⁾があるが、その活動内容は、国際理解・親善と地域社会への奉仕、この2つが柱となっており、「子ども・若者ビジョン」で示された「社会参加の促進」の具体的な内容と合致する。

本研究では、そのインターアクトクラブに着目して、活動に対する高校生の意識・実態、活動による学習効果を明らかにする。文化部活動といっても、その種類や活動内容は多種多様であり、一括して論じることは困難を伴う。そのため、文化部活動の個別・具体的な実践やそれによる学習効果の検証の蓄積が求められる。本研究はその一つに位置づくものであると考えている。

2 方法・対象

(1) 質問紙調査

2010年5月から同年8月にかけて国際ロータリー第2760地区のインターアクトクラブ全16クラブを対象に、郵送法による質問紙調査を行った。

全16クラブ中7クラブから回答が寄せられた(回収率43.8%)。その詳細は、インターアクトクラブ顧問7名、インターアクトクラブに所属する高校生(以下、インターアクトクラブ高校生)121名、インターアクトクラブがある学校に在籍する高校生(以下、一般高校生)165名である。

表2 高校生の属性 (%)

	性別		学年		
	男子	女子	1年生	2年生	3年生
インターアクトクラブ高校生	19.8	80.2	27.4	37.6	35.0
一般高校生	24.8	75.2	0.0	18.5	82.5

(2) 聞き取り調査

2011年3月に、上記インターアクトクラブの中の2クラブの顧問・生徒を対象に、30～60分間の半構造化インタビューを実施した。

Aクラブ

顧問(女性)、生徒A-1(2年生男子)、生徒A-2(1年生女子)

Bクラブ

顧問(男性)、生徒B-1(2年生女子)、生徒B-2(1年生女子)、生徒B-3(1年生女子)

3 内容

(1) 質問紙調査

顧問対象調査では、インターアクトクラブの活動環境（活動場所、活動費など）、活動内容（活動目標、活動時間など）、自由記述（活動による高校生の変化、運営上の課題）について聞いた。

高校生対象調査では、社会力^③、ボランティア学習レディネス^④、高校入学後のボランティア経験について聞いた。また、インターアクトクラブ高校生に対しては、自由記述で、「インターアクトクラブを知らない人に説明する時、どのように説明しますか。」と回答を求めた。

(2) 聞き取り調査

顧問対象調査では、活動を通して生徒に期待すること、活動に独自性を出す工夫、活動領域・内容・範囲の拡大と精選・選定のポイント、活動を企画・運営する際の教師・生徒間の主導権のバランス、学校外で活動を行う際の留意点、学校の支援体制・理解、ロータリークラブとの関係などを聞いた。

高校生対象調査では、入部した動機、印象に残る活動とその理由、活動を通して実感できる自分自身の変化や成長、活動する上で困ること、他のインターアクトクラブとの交流などを聞いた。

4 結果

本稿では、高校生対象の質問紙調査の結果を中心に概観し、その解釈など考察する際に、他調査の結果を加味する。なお、顧問対象の質問紙調査の結果については、別稿^⑤を参照されたい。

(1) 社会力

全23項目（各4点満点）について、「まったくあてはまらない」（1点）～「とてもあてはまる」（4点）の4件法で質問した。「かなりあてはまる」と「とてもあてはまる」を合計して「あてはまる」として、その結果をみている。

表3 インターアクトクラブ高校生の社会力 (%)

	まったくあてはまらない	あまりあてはまらない	かなりあてはまる	とてもあてはまる
1. 困っている人を見ると、すぐに助けたくなる	0.8	14.1	57.9	27.3
2. 友だちが何か失敗したら、励ましてあげる	1.7	5.8	51.2	41.3
3. 友だちが何かしてくれたら、必ずお礼を言う	0.0	1.7	24.8	73.6
4. 相手の気持ちをよく考えてつきあう	0.0	16.5	52.9	30.6
5. 引き受けたことは、最後までやりとおす	0.0	7.6	53.8	38.7
6. 相手が話すことを、きちんと聞く	0.0	11.6	59.5	28.9
7. 誰にでも親切にしてあげる	1.7	19.0	54.6	24.8
8. 知らない人とでもすぐに仲良くなれる	9.9	37.2	38.0	14.9
9. ひとりであるよりも、大勢の人というほうが好き	4.1	31.4	40.5	24.0
10. 他の人の話を聞くのが好き	0.0	19.0	53.7	27.3
11. 体を動かして、汗を流すのが好き	6.6	29.8	32.2	31.4
12. 知らないことは、他の人に聞いて教えてもらう	3.3	22.3	43.0	41.3
13. お父さんやお母さんといろんな話をする	4.2	18.3	27.5	50.0
14. 近所の大人の人もよく話をする	22.3	34.7	26.5	16.5
15. 地域によく知っている大人が何人かいる	11.6	28.9	36.4	23.1
16. 信頼できる大人が身近に何人かいる	5.8	26.5	38.0	29.8
17. 大人と話をしたり、一緒に何かをしたりするのが好き	8.3	25.8	43.3	22.5
18. 大人の人に教えてもらいながら、一緒に何かをしたりするのが好き	5.8	35.5	40.5	18.2
19. やったことがないことは、何でも自分でやってみたくなる	0.0	30.6	46.3	23.1
20. 知らないことがあると、誰かに聞いたり、自分で調べてみたくなる	2.5	31.4	42.2	24.0
21. 他の人がやっていることは、何でも自分もやってみたくなる	3.3	38.3	35.8	22.5
22. 事件のことをニュースで聞くと、どうしてこんなことが起きるのだろうと、あれこれ考える	6.7	26.1	41.2	26.1
23. 他の国の人の悲しいニュースを聞くと、自分も悲しくなる	7.4	20.7	40.5	31.4

「3. 友だちが何かをしてくれたら、必ずお礼を言う」98.4%、「2. 友だちが何か失敗したら、励ましてあげる」92.5%、「5. 引き受けたことは、最後までやりとおす」92.5%の3項目で「あてはまる」割合が90%を超えた。他方、「14. 近所の大人の人ともよく話をする」43.0%、「8. 知らない人とでもすぐに仲良くなれる」52.9%は5割前後で比較的低かった。

次に、平均点に着目して、インターアクトクラブ高校生と一般高校生の比較を行ってみる。

得点差の大きかった項目は、「17. 大人と話をしたり、一緒に何かをしたりするのが好き」0.41点差、「16. 信頼できる大人が身近に何人かいる」0.39点差、「18. 大人の人に教えてもらいながら、一緒に何かをしたりするのが好き」0.29点差などで、いずれもインターアクトクラブ高校生の得点が高かった。得点差の小さかった項目では、「4. 相手の気持ちをよく考えてつきあう」0.00点差、「10. 他の人の話を聞くのが好き」0.01点差、「20. 知らないことがあると、誰かに聞いたり、自分で調べてみたくなる」0.01点差などであった。

表4 社会力の比較 (上段 平均値, 下段 標準偏差)

		インターアクトクラブ高校生	一般高校生	得点差	t値
得点差の大きかった項目	17. 大人と話をしたり、一緒に何かをしたりするのが好き	2.80 (0.89)	2.39 (0.85)	0.41	3.97**
	16. 信頼できる大人が身近に何人かいる	2.92 (0.89)	2.53 (0.91)	0.39	3.58**
	18. 大人の人に教えてもらいながら、一緒に何かをしたりするのが好き	2.71 (0.83)	2.42 (0.86)	0.29	2.82**
	13. お父さんやお母さんといろんな話をする	3.23 (0.90)	2.95 (0.82)	0.28	2.75**
	1. 困っている人を見ると、すぐに助けたいくなる	3.12 (0.66)	2.89 (0.72)	0.23	2.69**
5. 引き受けたことは、最後までやりとおす	3.31 (0.61)	3.09 (0.70)	0.22	2.83**	
得点差の小さかった項目	4. 相手の気持ちをよく考えてつきあう	3.14 (0.68)	3.14 (0.65)	0.00	n.s.
	10. 他の人の話を聞くのが好き	3.08 (0.68)	3.09 (0.77)	0.01	n.s.
	20. 知らないことがあると、誰かに聞いたり、自分で調べてみたくなる	2.88 (0.80)	2.87 (0.78)	0.01	n.s.
	11. 体を動かして、汗を流すのが好き	2.88 (0.93)	2.90 (0.97)	0.02	n.s.
	8. 知らない人とでもすぐに仲良くなれる	2.58 (0.86)	2.61 (0.92)	0.03	n.s.

**p<.01

(2) ボランティア学習レディネス

全29項目(各5点満点)について、「あてはまらない」(1点)～「きわめてあてはまる」(5点)の5件法で質問した。「少しあてはまる」～「きわめてあてはまる」を合計して「あてはまる」として、その結果をみてる。

「10. 相手の立場に立った行動ができる」99.5%、「5. 人の意見に耳を傾けることができる」99.2%、「26. 障害者に対してやさしく接することができる」98.3%、「13. 高齢者に対してやさしく接することができる」97.5%の項目で「あてはまる」割合が高かった。他方、「3. 生涯学習ボランティアについてよく知っている」70.2%、「11. ボランティア関連事業を企画・運営する自信がある」71.1%、「12. 見本を示してわかりやすく解説するのが得意である」71.1%は、約7割で比較的低かった。

表5 インターアクトクラブ高校生のボランティア学習レディネス (%)

	あてはまらない	少しあてはまる	わりとあてはまる	かなりあてはまる	きわめてあてはまる
1. 環境保護・保全についての知識・技能に自信がある	25.6	51.2	15.7	5.0	2.5
2. 他者に奉仕することは自分の人生を充実させる	5.0	17.4	33.1	28.9	15.7
3. 生涯学習ボランティアについてよく知っている	29.8	44.6	18.2	6.6	0.8
4. 自分の知識や技術を誰かに伝えたいと思う	12.6	24.4	37.0	15.1	10.9
5. 人の意見に耳を傾けることができる	0.8	11.8	38.7	30.3	18.5
6. 社会福祉についての知識・理解がある	16.5	32.2	34.7	12.4	4.1
7. 集団でのゲームなどの指導をするのが得意である	21.5	25.6	28.1	21.5	3.3
8. 海外のボランティア事情について理解がある	25.6	36.4	22.3	8.3	7.4
9. 新しく身につけた学習成果を様々な場で活用したい	5.8	19.0	25.6	25.6	24.0
10. 相手の立場に立った行動ができる	0.5	24.2	37.5	24.2	9.2
11. ボランティア関連事業を企画・運営する自信がある	28.9	34.7	24.0	9.1	3.3
12. 見本を示してわかりやすく解説するのが得意である	28.9	31.4	24.8	10.7	4.1
13. 高齢者に対してやさしく接することができる	2.5	11.6	32.2	32.2	21.5
14. ボランティアに取り組むことは生きがいの一つである	11.6	19.8	31.4	18.2	19.0
15. 様々な国の人々に親切に接することができる	3.3	23.1	33.1	22.3	18.2
16. 野外活動についての知識・技能がある	22.5	31.7	28.3	10.0	7.5
17. ボランティアの活動分野・領域の広さを知っている	13.2	43.8	27.3	11.6	4.1
18. 状況に応じて正しく判断し他者を導くことができる	18.3	29.2	34.2	10.8	7.5
19. 国際的な分野で活動・仕事がしたい	16.7	24.2	16.7	19.2	23.3
20. 子どもに対してやさしく接することができる	3.3	7.4	19.0	33.9	36.4
21. 人の喜びを自分の喜びとして感じるすることができる	3.3	9.1	23.1	28.9	35.5
22. 自分の知識・技能を他人のために役立つことができる	7.4	25.6	37.2	22.3	7.4
23. 言葉がわからなくても身振り・手振りでコミュニケーションできる	6.6	21.5	27.3	20.7	24.0
24. ボランティア活動を取り巻く現代的課題について理解がある	15.7	36.4	30.6	11.6	5.8
25. ボランティア活動は自分の成長に役立つと感じる	4.1	11.6	23.1	26.5	34.7
26. 障害者に対してやさしく接することができる	1.7	14.9	28.9	30.6	24.0
27. 人前で自分の意見がはっきり言える	10.7	31.4	34.7	11.6	11.6
28. 道具などの使い方を他人に説明するのが得意である	18.2	31.4	30.6	12.4	7.4
29. 異国の文化や言語などに興味・関心がある	8.3	18.2	19.8	19.8	33.9

次に、平均点に着目して、インターアクトクラブ高校生と一般高校生の比較を行ってみる。

得点差の大きかった項目は、「14. ボランティアに取り組むことは生きがいの一つである」1.00点差、「25. ボランティア活動は自分の成長に役立つと感じる」0.97点差、「17. ボランティアの活動分野・領域の広さを知っている」0.61点差などで、どの項目もインターアクトクラブ高校生の得点が高かった。得点差の小さかった項目では、「12. 見本を示してわかりやすく解説するのが得意である」0.00点差、「27. 人前で自分の意見がはっきり言える」0.00点差、「28. 道具などの使い方を他人に説明するのが得意である」0.02点差などであった。

表6 ボランティア学習レディネスの比較 (上段 平均値, 下段 標準偏差)

		インターアクトクラブ 高校生	一般 高校生	得点差	t値
得点差の大きかった項目	14. ボランティアに取り組むことは生きがいの一つである	3.13 (1.27)	2.13 (1.08)	1.00	7.17**
	25. ボランティア活動は自分の成長に役立つと感じる	3.76 (1.17)	2.79 (1.21)	0.97	6.76**
	17. ボランティアの活動分野・領域の広さを知っている	2.50 (1.00)	1.89 (1.00)	0.61	5.11**
	15. 様々な国の人々に親切に接することができる	3.29 (1.11)	2.71 (1.18)	0.58	4.22**
	16. 野外活動についての知識・技能がある	2.48 (1.17)	1.91 (1.05)	0.57	4.36**
	26. 障害者に対してやさしく接することができる	3.60 (1.06)	3.04 (1.13)	0.56	4.25**
	2. 他者に奉仕することは自分の人生を充実させる	3.33 (1.09)	2.79 (1.17)	0.54	4.00**
	23. 言葉がわからなくても身振り・手振りでコミュニケーションできる	3.34 (1.24)	2.82 (1.26)	0.52	3.44**
得点差の小さかった項目	12. 見本を示してわかりやすく解説するのが得意である	2.30 (1.12)	2.30 (1.27)	0.00	n.s.
	27. 人前で自分の意見がはっきり言える	2.82 (1.14)	2.82 (1.31)	0.00	n.s.
	28. 道具などの使い方を他人に説明するのが得意である	2.60 (1.14)	2.62 (1.30)	0.02	n.s.
	10. 相手の立場に立った行動ができる	3.08 (1.03)	3.05 (1.01)	0.03	n.s.
	18. 状況に応じて正しく判断し他者を導くことができる	2.60 (1.13)	2.56 (1.10)	0.04	n.s.

**p<.01

(3) 高校入学後のボランティア経験

全23項目について、「経験なし」～「7回以上」の5件法で質問した。「1～2回」～「7回以上」を合計して「経験あり」として、その結果をみている。

「経験あり」の割合が高い項目として、「1. 子どもの遊び相手」75.2%、「10. 地域のイベントやお祭りの手伝い」70.2%、「15. 空き缶拾い・草刈りなどの清掃活動」69.4%、「3. 高齢者施設の訪問」61.2%があった。他方、「22. 遺跡発掘の手伝い」1.6%、「16. 子どもの野外キャンプの指導」3.3%、「7. 博物館・美術館などでの作品説明や案内活動」8.3%、「13. 史跡などの観光施設の説明・案内」8.3%、「18. エイズなどの難病を克服する人の支援活動」8.3%は「経験あり」の割合が1割に満たず少なかった。

次に、インターアクトクラブ高校生と一般高校生の比較を行ってみる。

「経験あり」の差が大きかった項目は、「20. 手話や点字・朗読サービス」41.9ポイント差、「17. 歳末助け合い運動などの募金活動」33.1ポイント差、「3. 高齢者施設の訪問」32.8ポイント差、「12. 障害者施設の訪問」32.1ポイント差などで、どの項目もインターアクトクラブ高校生の得点が高かった。差が小さかった項目は、「5. 郷土料理・地域芸能などの地域文化の伝承」0.5ポイント差、「7. 博物館・美術館などでの作品説明や案内活動」1.0ポイント差、「22. 遺跡発掘の手伝い」1.4ポイント差などであった。

表7 インターアクトクラブ高校生のボランティア経験 (％)

	経験なし	1～2回	3～4回	5～6回	7回以上
1. 子どもの遊びの相手	24.8	14.9	14.9	9.1	36.4
2. 留学生や外国人の相談相手	70.0	20.0	5.8	1.7	2.5
3. 高齢者施設の訪問	38.8	23.1	16.5	9.9	11.6
4. 町内や団地などの自治会の手伝い	50.8	23.3	15.0	4.2	6.7
5. 郷土料理・地域芸能などの地域文化の伝承	77.7	14.9	5.8	0.0	1.7
6. 空き缶や牛乳パックなどのリサイクル活動	42.2	20.7	9.1	1.7	26.5
7. 博物館・美術館などでの作品説明や案内活動	91.7	5.0	1.7	0.8	0.8
8. 子どもへのスポーツやレクリエーションの指導	72.7	15.7	4.1	2.5	5.0
9. 被災者・難民に救援物資を送る活動	80.0	13.3	3.3	0.0	3.3
10. 地域のイベントやお祭りの手伝い	29.8	32.2	13.2	6.6	18.2
11. 消防・防犯・交通安全に関する活動	75.2	17.4	5.8	0.0	1.7
12. 障害者施設の訪問	54.6	23.1	9.9	4.1	8.3
13. 史跡などの観光施設の説明・案内	91.7	6.6	0.8	0.0	0.8
14. 病気の人の手助けや話し相手	65.3	19.8	7.4	0.0	7.4
15. 空き缶拾い・草刈りなどの清掃活動	30.6	31.4	21.5	4.1	12.4
16. 子どもの野外キャンプの指導	96.7	2.5	0.0	0.0	0.8
17. 歳末助け合い運動などの募金活動	46.3	19.8	13.2	5.8	14.9
18. エイズなどの難病を克服する人の支援活動	91.7	5.0	1.7	0.0	1.7
19. まちづくりに関わる活動	62.8	9.9	7.4	3.3	16.5
20. 手話や点字・朗読サービス	49.6	9.9	5.0	2.5	33.1
21. 子どもの学習の面倒をみる活動	68.6	14.9	3.3	2.5	10.7
22. 遺跡発掘の手伝い	98.4	0.8	0.0	0.8	0.0
23. 野生生物や自然環境の保護活動	81.0	11.6	3.3	0.0	4.1

表8 ボランティア経験の比較 (％)

	インターアクトクラブ 高校生	一般 高校生	経験率 の差	
得点差の 大きかった 項目	20. 手話や点字・朗読サービス	50.4	8.5	41.9
	17. 歳末助け合い運動などの募金活動	53.7	20.6	33.1
	3. 高齢者施設の訪問	61.2	28.4	32.8
	12. 障害者施設の訪問	45.4	13.3	32.1
	10. 地域のイベントやお祭りの手伝い	70.2	41.8	28.4
	19. まちづくりに関わる活動	37.2	12.1	25.1
差の 小さい 項目	5. 郷土料理・地域芸能などの地域文化の伝承	22.3	21.8	0.5
	7. 博物館・美術館などでの作品説明や案内活動	8.3	7.3	1.0
	22. 遺跡発掘の手伝い	1.6	3.0	1.4
	13. 史跡などの観光施設の説明・案内	8.3	5.4	2.9
	18. エイズなどの難病を克服する人の支援活動	8.3	4.8	3.5
6. 空き缶や牛乳パックなどのリサイクル活動	57.8	53.9	3.9	

5 考察

(1) 社会力

インターアクトクラブ高校生の特徴に、「大人」との関わりについての資質・素養や責任感に関わる資質の高さがある。その一方で、大人に限定されない他者との関わり方、特に他者受容に関わる事柄については、一般高校生と大きな違いは認められない。そこで、生徒や顧問の口述から、その要因を探ってみることにする。なお、口述記録の下線は筆者が付記したものである。

【生徒A-2】

高校生が大人と関わるっていうのは、お父さん、お母さんとか、そこら辺しか多分ないんじゃないかなって。インターアクトクラブに入った今、関わりとったら、やっぱりいろんな人たちに。関わるっていうのも、やっぱり会うだけとか、話してみるとか、そういうのもいろいろあると思うんですけど、私は、このインターアクトクラブに入って、大人のやっぱり人たちがいっぱいいるわけで、ロータリアン®の人とか出会って。ライラ®ばかりになっちゃうんですけど、そのライラ研修の中で、大人の人たちと話す機会がすごく増えて。でもインターアクトクラブ以外の高校生にとっての大人の人っていうのは、やっぱり教師だったりするじゃないですか。実際私は、全然、生徒の話なんか聞いてくれないとか、冷たいなって思ってたんですよ。「嫌いだ」とか思ったときもあったんですよ。でも、意外と、他人の大人の人と話してみると、「ちゃんと話聞いてくれるじゃん」みたいな。

(中略)

意外だなんていうのを感じて。今まで「大人の人だ」って避けてたんですけど、でも最近は、「おはようございます」って、自分から言うようになったし。大人って、いろんな年齢幅あって、私の家の近くに、おじいさん、おばあさんが多いんですよ。だから、あんまりみんな、60、70、80ぐらいなので、40とかそこら辺の人に会ったことなくて。

(中略)

だから、インターアクトクラブで、大人の関わり方で大切なのは、コミュニケーションの数かなあって思います。

【Aクラブ顧問】

人前で発表するということは避けて通れないです。ロータリーの例会に参加させていただくことがあったりとか、年次大会に行くと、大人だけの世界に行ったりとか、ライラで言うと、もうちょっと目上の人たちだったりとか、チャンスが多いので。普通の子たちは、そこまでいかないですね。ボランティアっていても、やはり高齢者の人たちですかね。研修会に行くと、自分たちだけじゃなくって、その先生、ロータリーのかたとずっとコミュニケーション取ってやっていく必要に迫られます。場があるってことは大きいですね。

【生徒A-2】にあるように、高校生にとって日常生活の中で関わる機会のある「大人」は、保護者や教師の場合が多く、それ以外の「大人」と接する機会はあまりないのが実情であるかもしれない。それが、インターアクトクラブでの活動を通して、ロータリアンをはじめ、様々な「大人」と関わり、また、その過程で「大人」に対する信頼感のようなものも感得しているものと思われる。

さらに、【Aクラブ顧問】の言葉からわかるように、「大人」を含めた多くの人前で発表する機会に恵まれており、そこでの経験を通して、社会力を向上させているのではないかと考えられる。顧問対象調査の自由記述で高校生の変化について回答を求めた際も、「世代の違う人たちとの交流により視野が広がる。」「ボランティアあるいは研修を通じて、人との接し方、コミュニケーションの仕方を学ぶことができたようである。」といったことが挙げられている。

インターアクトクラブ高校生と一般高校生の違いは、「大人」と関わる機会があり、場数を踏むことができているか否か、必要に迫られるものであれ何であれ、自己表現する経験を積んでいるか否か、それらに起因するものであると考えられる。

(2) ボランティア学習レディネス

ボランティアの意義の認識やそれも含めた理念的理解度が高いこと、自己実現につながるという意識の-highいことが、インターアクトクラブ高校生の特徴としてある。他方、解説や説明に関わるスキルや技術やリーダーシップにつながるような要素に関しては、一般高校生と同程度である。

【生徒A-2】

私の友達は「面倒くせえ」って言うんですよ、やるときに。「そんな、人のためにやるとか、お金入るわけじゃないし」とか言って、「やるのやだ」ってみたいなことをよく言ってて。でも、遊んでるときと違ったんですよ。

(中略)

確かに面倒くさいというときもありますよ、そりゃあ。でも、もしかしたら、「これやったら、こういう人と出会えるかもしれない」とか、「これやったら、こうなるかもしれない」とか、ある意味、逃げ道というか、「つらいことがあったら、これに打ち込んでしまおう」とか、「忘れてしまおう」とか、そういうふうに、逆に、「空いてるなら、やりたい」みたいな感じになりました。

【生徒B-1】

将来の夢が、保育士になりたいということがあって、部活動紹介で保育士を目指している人におススメと聞いて仮入部をしに行ったら、すごく笑顔でいろんなことを教えてくれる先輩がいて、あと、ボランティアとか手話にも興味があったので、この部活に入って、いろんな経験をしたいなと思ったのがきっかけです。

(中略)

いろんなところに行ったときに、いろんな人に会えて、自分と違う人の意見を聞いたり、それで自分の考え方が変わったりして、自分自身すごく成長することが出来たので、この部活に入って一番自分のためになってるっていうか、よかったことかなと思います。

生徒の口述を見ると、【生徒A-2】にあるように、“面倒くさい”という思いを持ちながらも、それ以上に、活動することによって得られる出会いがあることを期待し、積極的にボランティアに向き合おうとしていることがわかる。また、【B-1】からも、人との出会いによってもたらされる自己成長についての意識が明確であることがうかがえる。さらに、キャリア形成に関わって、将来の目標がはっきりしていて、その実現の一助とするために活動に取り組んでいるということも、ボランティア学習レディネスの高さの背景にあるのではないかと考えられる。顧問対象調査の自由記述に、「ボランティア、イベント活動を生徒が自主的に実行することにより、リーダーシップの能力が着実に身についていると思います。」というコメントがあり、リーダーシップが養成されていることも、こうした結果に寄与しているものと思われる。

総じて、人との出会いを積極的・肯定的に捉えていることと目的意識の高さが、インターアクトクラブ高校生と一般高校生の違いに反映されているものと思われる。ただ、インターアクトクラブ高校生にとっての出会いに関して、出会いを受動的に受け止めている、すなわち、能動的に捉えて、そこから自分が主導権を握って物事を進めるという段階には至っていないのではないかと推察される。

(3) 高校入学後のボランティア経験

インターアクトクラブ高校生は、施設訪問を中心とした福祉活動やまちづくりに関連する活動の経験率が高いことが明らかである。他方、地域文化の伝承や社会教育施設での実践など、高度な専門性の求められる活動経験は、一般高校生とあまり差はない。

【Bクラブ顧問】

今はもう、地域でも、学校の中も、僕の手前味噌かもしれないけど、うちのクラブがないと、地域のイベントが成り立たないようになったし。もう1個は、私、断りませんからね、来たらね、空いてる以上は。たまたま、人数多いから、二つ三つと、これはなかなかできないんだって、他のクラブ。

普通、意外と、お願いしても、1個所に行くだけじゃん。うち、三つのイベントでも四つのイベントでも、全部分けて行けますからね。その中にちゃんとリーダーいますから、基本的に顧問がいないのが当たり前のクラブなんで、それはいいですね。もし顧問主導型でやってると、二つあると、「俺はどっち行くんだ」というね。行かないところは、不安でしょうがないというね。今の子どもたちは、僕がいないことが最初から前提になって活動が成り立ってるから、たまに行くと、「先生、来たの？」とか言ってね。それは、リーダーが育ってる証拠だと思うんで。リーダーが全部、施設さんとのやり取りも全部。僕は一切電話しませんからね。それがリーダーシップになるのかどうかわからないんですけど、人をまとめて動かしてる、ちっちゃな集団ですけどね。にはなってるなど。

それがまた相乗効果で、こういうオープンスクールみたいなところでうまく活用ができる。ほんとに、他の人がびっくりしますもんね。先生たちの係があるじゃないですか。そこにうちのインターアクトクラブを何人か、先生たちを助けるんですよ。そうすると、みんなびっくりしますからね。「何も言わなくても、やってくれる」とかね。それは実は当たり前なんだけど、よっぽど他の生徒が動かないのかなってね。指示をしないと、動かない。うちの子どもたちは逆に、「聞け」って言うから、全部。「どうしましょうか」ってね。それはいまだに僕との関係がそうなんで、寂しいなという気はある。それはうまく、たまたまですけど、うまく回ると思いますけどね。

【Bクラブ顧問】の口述にあるように、同じ日に複数のイベントに参加できる体制が整えられていることは看過できない。当たり前であるが、たくさんの活動機会に恵まれていることは、経験率の向上に大きく寄与するであろう。

ただ、ここで留意する必要があるのは、いかにそうした活動機会の確保をするのかということである。口述記録にはないが、【Bクラブ顧問】は積極的に地域社会の諸活動に参加して、ネットワークを拡大し、実践の場の開拓・拡大に努めている。その一方で、イベントで披露できる水準の活動になるように生徒の日常的な部活動を支援している。こうした【Bクラブ顧問】の動きとそれに呼応した生徒の動きが効果的に機能していることが、インターアクトクラブ高校生の経験率の高さに表れているものと思われる。しかしながら、高度な専門性の求められる活動については、そうしたノウハウを活かすのが容易ではないといえるのかもしれない。

また、顧問対象調査の自由記述に、「本校では市の社会福祉協議会からの依頼でボランティア活動を引き受け、実施している。年間を通して、その予定をこなすのが精一杯の状態です、本校独自の企画もあるが、生徒がもっと自主的にアイデアを出して活動できると良いと思う。」とあるように、場数を踏み、経験を重ねると同時に、高校自身の自由な発想や日頃の問題意識などから独創的な活動を展開することができるように支援することも重要になる。そうした経緯で取り組むようになった活動であれば、たとえ高度な専門性が必要とされようとも、ある程度は対応することができるようになるのではないと思われる。

6 今後の課題

社会力やボランティア学習レディネス、ボランティア経験において、インターアクトクラブ高校生の資質・素養等が高いことを勘案すると、インターアクトクラブが広く定着することが期待される。しかし、愛知県におけるインターアクトクラブ設置状況をみると、調査時である平成22年度は、全222校中15校に設置されており、設置率6.8%である（定時制を除く219校中では15校に設置、設置率6.8%）。通常の部活動とは異なり、設立までの諸手続きが学校内だけで完結するものではないだけに、飛躍的な拡大は容易ではないと思われる。

ただ、ボランティア活動という視点から捉えると、インターアクトクラブだけではなく、ボランティア部・同好会・サークル、JRC部・同好会などもボランティア活動に取り組んでいる⁸⁾。そうしたボランティア系部活動について、活動成果を検証する必要がある。既存のボランティア系部活動の存在意義を明確にし、それが認められれば、拡大・定着の一助になるのではなかと考えられる。

また、回答者の属性を見た時に、女子への偏りが大きい。インターアクトクラブも含めた文化部への加入率は女子の方が高いことなど、諸要因があると思われるが、サンプル数を蓄積し、性や学年による異同を明らかにすることも求められよう。

注記

(1) 表1は以下の報告データをもとに作成した。

- ・中学生・高校生のスポーツ活動に関する調査研究協力者会議「運動部活動の在り方に関する調査研究報告」1997
- ・Benesse教育研究開発センター「第1回子ども生活実態基本調査報告書 小学生・中学生・高校生を対象に」(研究所報VOL.33) 2005
- ・東京大学教育学部比較教育社会学コース・Benesse教育研究開発センター共同研究「都立高校生の生活・行動・意識に関する調査報告書」(研究所報VOL.49) 2009
- ・Benesse教育研究開発センター「第2回子ども生活実態基本調査報告書 小4生～高2生を対象に」(研究所報VOL.59) 2010

(2) インターアクトクラブの詳細は、下記の論文を参照されたい。

林幸克「インターアクトクラブに関する基礎的研究—愛知県におけるインターアクトクラブ協議会と名古屋インターアクトクラブの事例—」『名古屋学院大学論集社会科学篇』第46巻第3号, 2010, pp.85-99.

(3) 社会力とは、「社会を作り、作った社会を運営しつつ、その社会を絶えず作り変えていくために必要な資質や能力」(門脇厚司『子どもの社会力』岩波新書, 1999, p.61.)と定義される。また、門脇の開発した社会力測定項目を活用した(門脇厚司「社会力の構成要素と学力との関連性に関する試論」『筑波学院大学紀要』1, 2006, pp.15-27.)。

(4) ボランティア学習レディネスとは、「ボランティア学習に臨むための準備的な構え及び適応状態」(林幸克『高校生のボランティア学習』学事出版, 2007, p.107.)のことである。

(5) 林幸克「「インターアクトクラブに関する調査」報告書」2011

(6) ロータリアンとは、ロータリークラブの会員のことである。

(7) ライラとは、ロータリーが青少年指導者養成のために行っているプログラム(RYLA: Rotary Youth Leader Awards)のことである。

(8) 林幸克『高校教育におけるボランティア活動—データと事例に基づく実証的検証—』学文社, 2011, p.62.

本研究は2010年度マツダ研究助成—青少年健全育成—の補助を受けて行った研究成果の一部である。